

# あがな 贖いの日々

叫びを聴く

被害者や遺族、自分の家族、人生を狂わせる交通事故

その日は月末だったの  
で、いつものように  
仕事は忙しく昼食も取らず  
に慌ただしく仕事をしてい  
ると、他の支店の仲の良い  
上司から「たまには飲みま  
行こうよ」と誘いがありま  
した。ちょうどその日はい  
やなことがあったため、愚  
痴でも聞いてもらおうと久  
し振りに会うことになりま  
した。

居酒屋で待ち合わせを  
し、そこでビール1本と焼  
酎のウーロン割り3〜4杯  
飲みました。昼食抜きだっ  
たので酔いが回り、気分も  
よくなっていました。

時間も10時を過ぎて明日  
も忙しいということで、そ  
の場で解散となりました。

いつもならそこで帰るの  
ですが、その日に限って臨  
時収入があったので「たま  
にはスナックでも行ってみ  
るか」と思い、車を走らせ  
たのです。そこでも焼酎の  
水割りを3〜4杯ほど飲  
み、カラオケを数曲歌って  
いるうちに時間は午前零時  
を回っていたのです。

車の中で休んで朝帰りを  
しようかと思った  
のですが、  
明日も  
忙し  
いので  
家に帰っ  
て布団で寝た方  
が疲れは取れると思ひ、ま  
たもや車を走らせたので  
す。



そして、その帰り道の途  
中、信号機の見落としに  
より左方から直進してき  
た車と衝突してしまったの  
です。一瞬「ドーン」とい  
う音と同時にエアバックが  
作動し目の前が真っ白にな  
り「キーン」という耳鳴  
りがし、自分の車は惰性で  
100メートル位走った  
後、たまたまそこが分岐点  
だったので事故現場から見  
づらい場所に止まっていた  
のです。

私はシートベルトを締め  
ていたため幸いにも大した  
怪我もありませんでした。  
そこで、「自分が大した  
ことないのだから、相手の  
人も大したことはないだろ  
う」と自分勝手な解釈をし、  
相手の車を確認せず相手の  
方を救護することなく自分  
の車を道端に置いて、その  
場から逃げてしまったので  
す。

現場から15分ほど歩き、  
タクシードで家に帰り妻に報  
告した後に、ふと我に返り  
「自分は何やってるんだ。  
相手の人が怪我をしている

かもしれないのに」と思い、  
電話でタクシーを呼び、現  
場に出頭して現行犯逮捕と  
なりました。

その場で相手の方が即死  
したことを警察官から聞  
き、目の前が真っ暗になり、  
その場で崩れ落ちてしま  
いました。

「自分だけは大丈夫だろ  
う」という自分勝手な考え  
が尊い人の生命を奪い、幸  
福な家族を一瞬にして不幸  
のどん底に陥れてしまった  
のです。今まで人を傷つけ  
たこともなかった私が人殺  
しをしてしまったのです。

私は留置場に拘束されて  
いる間、「何と大変なこと  
をしてしまったのだろう  
か」「何で私が生きていて  
相手が亡くなってしまった  
のか。自分が死ねばよかつ  
た」などと毎日後悔し、眠  
れない夜が続きました。

その間、妻と両親には  
通夜、告別式、初七日、  
四十九日と、私に代わって  
伺わせてもらいました。遺  
族の方々からの憎しみは、  
私に代わって家族に向けら

れどんなにか辛い思いをし  
たのかと思うと、何もでき  
ない自分が情けなくなつて  
きました。

拘束されて約1ヶ月を過  
ぎた頃、会社の人事課の人  
が見えて、懲戒解雇の告知  
を受けました。約18年間勤  
務し、お客様、会社の人た  
ちに挨拶もできないまま、  
解雇となってしまいました。

第1回目目の公判にて懲役  
5年の求刑を受けた後、保  
釈申請により保釈が許さ  
れ、直ちに被害者宅へ謝罪  
に行きました。

線香を上げさせてもらっ  
て「本当に申しわけござい  
ませんでした」と頭を畳に  
こすりながら何度も謝りま  
した。奥様に「家に帰って  
子供を抱っこしないでよ  
ね。うちの子供は一生抱っ  
こしてもらえないんだか  
ら」と言われた私は、ただ  
ただ頭を深く下げるのが精  
一杯でした。

Y・K 40歳 元団体職員  
『贖いの日々』第39集から  
一部抜粋)

緊急特集 かけがえのない命と笑顔を守るために

## あなたが握る命のハンドル

『贖いの日々』は、交通事故の加害者となり市原刑務所に服役している人たちの悔悟の手記。行間からにじみ出る悲痛な叫びは、交通事故が被害者のみならず、加害者やその家族までも不幸のどん底まで陥れる悲惨なものとなるのが伝わってきます。

では、このような悲惨な事故を防ぐためにはどうすればいいのでしょうか。今月号では、私たちが被害者・加害者にならないために交通安全について考えます。



あがな  
『贖いの日々』

「財団法人東京交通安全協会」発行